

令和6年度 第1回学校運営協議会 議事録

日時：令和6年6月26日（水）10：00～12：00（於 会議室）

委員：2名欠席。

参加委員6人中4人（過半数）で、本日成立。

協議事項のテーマ：昨年度『教員のやりがい、専門性の向上、働き方改革』

今年度『時代のニーズに応じた授業作り』

昨年度から引き続き、教員のやり方や働き方改革も踏まえて、学校の教育活動の根幹である授業について協議を行う

1、現状報告

●令和6年度学校経営計画について

『1、めざす学校像』

最上位目標は『学び合い、認め合い、支え合い、みんなが主役として輝ける学校』。主語は『子ども達』と『教員』。

『2、中期的目標』

3年先を目標に、学校のスローガン『たのしく、ゆたかに、げんきよく』という3つのワードを1つ1つ当てはめ、令和8年度にどのような姿になっているかを想像し、打ち出している。

『たのしく』は支援教育力の向上、センター的機能の更なる発揮と専門性の高い教員集団の構築。授業力の向上では、令和8年度に『すいた学びスタンダード』を作り上げていく予定。

『ゆたかに』は、自立・自己実現、キャリア教育。しっかりと地域人材の活用モデルを作っていく。

『げんきよく』は、人権尊重のもと安心安全というところで、地域やPTAと連携した防災のブラッシュアップを進めていく。

『働き方改革、効率化』としては、学校自己診断のアンケートの数値を参考にしている。

●令和5年度進路状況について

- ・22名の卒業生について概要を説明。

●『時代のニーズに応じた授業作り』

- ・『すいた学びスタンダード』の確立に向け、今の時代に応じてiPad等の一人一台端末を活用した授業作りを進めている。
- ・どの学習グループでも、QRコードを読むことでアプリに飛ぶような、実際に端末を活用した授業が広まりつつある。
- ・課題として、一人一台端末がない状況がある。3年～5年前ぐらいに当時の児童生徒数で1台配備されたが、児童生徒数の増加に伴う不足分に対し、学部を超えて貸出しを行っている。
- ・一人一台端末の活用は、働き方改革でも非常に大事。授業準備として、新しい学び『アクティブラーニング』など、こちら（教員）が知識を与えていくというよりも、彼ら（児童生徒）がその端末を利用して知識を獲得するのを支援していくという授業スタイルになっている。その支援の流れをモデル化することで、より多くの教員が端末を使って、効率的に授業作りができると思う。
- ・『知識を活用し、日常生活の課題の解決する力をつける』ことや、『友だちと交流をしながら課題を見つけ

る対話的な活動』など、新しい授業展開をめざす。授業の流れをモデル化し、提示することで、全ての教師が実践できる授業をめざし、授業見学週間を設定。一方で、教員になかなか空き時間がなく、授業を見に行けないため、ビデオ撮影し、視聴研修するなど、実施率 100%をめざす。

- ・『自立活動』としては、授業時間としておこなう自立活動と、教育活動全体（大グループの活動や授業、全体を通じて）の自立活動があり、一人ひとりの障がい特性、発達段階を踏まえた授業作りは、一律ではない。一人ひとり違いがあり、同じ設定でもいろんな違いが出てくるため、そこに、どう対応していくのかを検討していく必要がある。
- ・個別の教育支援計画は『授業とリンクしているか?』を意識化できるような取り組みをしていく。
- ・キャリア教育として、生涯に渡るキャリア発達が可能な授業、小学部からのキャリア教育という観点の授業に取り組んでいる。高等部卒業段階で、「学習したこと」「身に付いたこと」が確立できるよう、逆算して小学部から取り組み、小中高の連携や傾向性を確保する必要がある。具体的には、『全校キャリア教育実践項目』として、『あいさつをしよう』『自分の役割を果たそう』 余裕があったら『困っている人の力になろう』と、授業の中で実践の場を作ってもらえるよう、教職員に伝えている。
- ・カリキュラム・マネジメントでは、教育課程を毎年見直しをはかる。今の時代に応じた学びになっているか、可変的な教育課程を作っていきたい。授業担当の仕方や持ち授業数など、教員の負担軽減につながる働き方改革にも繋げていく。授業作りを根幹に、今の学校の在り方を考えていくことで、様々な学校の課題解決に繋げる。

2、協議

(委員)・地域の学校では、本を読んだり、何かを辞書で調べたりというのが、子どもたちの体験に繋がるからという理由で、『iPadの使用は極力しないほしい。』という方針の学校もある。支援学校で、今後 iPad を導入したことによって、何か他の課題が出てくるようであれば、また共有したい。

(委員)・就労支援では、段階に応じた自主性をどうやって育んでいくのか。キャリア教育の観点から、『自分の役割を果たそう』『困っている人の力になろう』というところで、自分の役割を果たしてから余裕があれば、困っている人に…というバランスが大事である。

- ・やり甲斐や、『来てよかった』『役に立った』など、これはこうすることで、人の役に立ったり、『この意味はこういうことに活かされるんだよ。』『こういうことがあるから、あなたがいてくれて助かるんだよ』と、伝えていくことが大事。それが本人の『頑張ろう』という気持ちに直結していく。
- ・ステップアップ、段階に応じて取り組むことがすごく大事。自分の役割と、困っているところに使えるだろうというバランスを、どういう形で示していくのが課題になってくる。

(委員)・『先生たちの専門性』の中で、『当たり前』が分らない・通じない場合、『吹田まなびスタンダード』の確立が活きる。『当たり前』が浸透し、その上で、時代によって考え方や求める姿も変わり、必要に応じてアップデートをしていくことが理想。

- ・自分の生活に支障のない範囲で iPad の使い方を覚え、便利なところだけ使う。また、危険性もちゃんと知ってほしい。
- ・「学校で (PC で) 何か作ったり、タイピングをしたり、使い方を学べる機会があったら、親としてもすごく助かる。
- ・自分の子どもが大きくなった時に、『こんなに成長したんだ。』と気付けるところがきっとある。

- (委員)・メディアリテラシー、データスキル教育を分かるように伝えていくというのは大切。一方で、情報の間違った使い方やトラブルはある。『家庭の問題』と位置付けたとしても、まず授業の中できちんと教育をしていかなければならないのではないかと。
- ・『PDCA サイクル』については、企業がどうやって学校と連携するか。企業のニーズを把握し、授業に活用していくのが課題。
- (校長)・日常生活の中で何か困難な場面に直面した時、知識や情報を得られるツールとして、授業の中で活用する力をつけてあげたい。難しさを感じるのは、こちらの意図とする使い方にならないこと。どのように管理、制限をするか、ご褒美的に使えるという時間をモチベーションにして学びをやっていくか、それが小学部段階から学びのグラデーションとなっていく。
- (教頭)・小学校段階からの就労、働くということに関する学びとしては、全てスモールステップ化している。その子自身、何が嫌なのか、何が困っているのかというところをしっかりと見て、保護者と話して、どのようにそれを進めていくか。
- ・小1では、教員とやり取りしながら、社会性を身につけていくという段階。五感を大事にすることを主とし、それぞれの発達段階に合わせて、どういうことが必要なかを考えて、取り組んでいる。
- (校長)・デジタル（仮想的）ではなく、実物に触れたり、体全体で体感したりということは絶対大事。価値的な活用ができるというところに終着点を置いている。
- ・自分の感情や気持ち、特にネガティブなことも含めて、できれば言語化したり、サインを使ったりして嫌なことは嫌と伝える、分からないことは分からないと言う。表出方法をツールとしてどう活用していけるかが非常に大事なテーマになっている。
 - ・遊びの要素は、支援学校ではすごく大事。遊び的なところからお金の価値や、必要なスキルを培っていく。
- (委員)・教科書について…知識は教師が与えるのではなく、児童生徒が ICT を活用して、自らその知識を展開していくような（教科書の）作りが随分変わった。
- (教員)・ICT 教材の公開などはホームページでしている。また、地域公開講座など、実際に地域の先生を招いての取り組みを7月の末に行っている。
- ・毎年、公開展示会として教材展示をし、地域の小中学校の先生方に勉強していただいている。
 - ・共有教材としては、教材アプリや自分で作ったプリントをデータで保存している。
- (校長)・まずは『見ること』『見て学ぶこと』から始めるというのが1番。授業見学週間については、まず見ることを第一に、何を学び、得たものを出し合って、教員がどんな観点で見たのかを共有する時間を作りたい。
- ・『個別最適な学び』と言っても、マンツーマンで対応する個別の塾のようなだけでは、『学校の学び』としてどうなのか。
 - ・社会に出ると圧力もあればストレスもある中で、どう折り合いをつけて、『個別最適』という、人と関わり合っているかという配分がすごく大事。

(委員)・保育士の資格取得にかかる費用の支援制度があるが、プログラマーのそういう制度は全くない。学校で色んな可能性がある中で、企業がもっとしていかないといけない。教科書を見せていただき、非常にありがたかったと同時に、反省もした。

次回 12月11日(水)